第一章
島原の町家と町なみ
キリシタン弾圧の痕跡

上　再現整備された島原城　　下　湊道の教会　昭和９年建築

1　島原の遺産

島原市は、城下町から発展したまちである。それだけに歴史的な遺産が多くある。まちの中心部に島原城跡、その西方に武家屋敷の町なみがあって保存されている。これらの遺産に加えて、普賢岳の前山である眉山は、豊富な伏流水を湧水として城下町をはじめ周辺のまちまちにもたらしている。これら島原の文化遺産自然遺産は、以前から市民や市当局に注目されていた。そして、これらの遺産を「まちづくり」や観光に活かす、さまざまな文化活動や経済活動を積極的におこなってきた。

普賢岳は活火山である。1990年（平成２）の大噴火は、島原半島のまちまちに多くの被害をあたえた。このことはまだ人々の記憶に生々しい。普賢岳は200年前の1792年（寛政４）にも大噴火している。このときにも多くの家々を破壊し、地形をも大きく変え、人々の生命を奪い、生活に甚大な被害をあたえた。この200年余り前の噴火もよく記憶されている。調査のさいに家々で建築年代をお聞きすると、200年前の大噴火の後であるという答えがしばしば返ってくる。また、今回の調査地である白土町（しらちまち）の白土湖（しらちこ）は200年前の大噴火のときにできた。

さて、近世の島原において注目される歴史的大事件は、1637年（寛永14）に始まる「島原の乱」である。この乱は、領主の過酷な年貢の取立て、キリシタンの弾圧などによる領民生活の困窮に起因している。キリシタンの徹底的な弾圧と熾烈な処刑によって、島原のキリシタンの根は断絶することになる。これらのキリシタン弾圧は、キリシタンでないことを誰にもすぐわかるような形で建物自体に表現する知恵を領民にあたえた。現在に残るこれらの痕跡として、家の正面入口に正月だけでなく一年中しめなわを飾っていることや、家の正面上手の道路沿いに仏間を張りだして設ける形式があげられる。これらはキリシタン弾圧の跡をしめす注目される遺産である。表に張りだす仏間形式は、明治６年（1873）のキリスト教解禁を境にしてなくなる。ただ、仏間ではないがこの位置に張りだしを造る家はその後もしばらくの間続いた。一方、しめなわを一年中飾ることは今も続いている。

キリシタン弾圧の痕跡を伝える、つまり誰にも見えるところに、しめなわを一年中飾る慣習や正面に張りだす仏間がある町家に関しては、島原城、武家屋敷、湧水などの遺産とくらべて、市民の間でこれまであまり注目していなかった。市民にとってはごく普通のことでありごく当たりまえのことであったのである。しかし、このしめなわや仏間のことは、島原の歴史、島原のまちの景観、民家の歴史などの諸点からして見過ごすことはできない珍しい貴重な習俗である。

今回の調査は上記の点に注目して「キリシタン弾圧の痕跡を残す町家と町なみ」と題するテーマをかかげ、島原市中心街の街道筋の町なみと町家の調査を実施した。この調査は、島原の歴史的な町なみと町家について新たな価値を見いだすささやかな探検でもある。この小さな調査研究の成果がこれからの島原のまちづくりに活用されることを期待している。

2　建築年代を測る物差

調査対象地区は、島原城の東側を南北に通っている旧島原街道筋を中心とした町なみである。南北の長さは約1.5キロメートルほどある。この街道筋とその周辺には、江戸時代末期から明治・大正・昭和初期に建てられた伝統的な町家が多く建っている。また、町家とともにその西側には寺院が多くある地域もある。

今回の調査は上に記した「キリシタン弾圧の痕跡を残す町家と町なみ」のテーマのもとに、基礎調査として建物の実測をおこない、まず町家建築の編年研究をすることとした。ここでいう編年研究とは、民家の「建築年代を測る物差」を作ることである。民家の史的な変遷を知るためには、個々の民家の建築年代がわかっている必要がある。建築年代を知る手段として編年研究をおこなう。

編年研究のために、調査は建物を観察し、概略の復原考察をくわえ、お互いに建物を比較しながら、時間とともに変化していく指標がなにか探しだすことから始めた。つまり、なにが古い要素であり形式であるか、またどれが新しい要素であり形式であるか、を見極めていった。指標を探しながらの編年研究、つまり、物差づくりは、未知数の数だけ方程式が揃わない数式を解くことに似ている。したがって、方程式が足りない

分だけ仮定を設定しなければならない。現在のところ調査対象の町家は、長屋など小規模なものを除き規模が比較的大きなものに限定している。この理由は、調査地域を限定したことと同様に、家々の規模をある範囲に限り、物差づくりにあたって未知数をできるだけ少なくするためである。

編年の指標は、時代によって変わっていく建物の材料、構造、細部形式、技法、部材の仕上げなど時代によって変わっていくさまざまな要素が取りあげられる。これらのうちには、①その地域に特有なもの、②その地域の周辺さらに広い範囲にも及ぶもの、③全国的に通じるものなどがある。これらの指標はそれぞれの地域の歴史や風土、建築文化、技術を反映している。一定の物差ができた暁には、地域を周辺に拡げ、また、小規模な建物にまで範囲を拡げて、比較対象を増やしていくことになる。

なぜ編年研究をするか。前に建築年代を知る手段として編年研究をおこなう、と書いた。民家や町なみの研究はそれぞれの人によってさまざまなテーマや方法が設定されるが、われわれは研究方法として建物そのものや町なみそのもの、つまり遺構（遺物）を基本資料として、まず建築史の基礎的研究をすすめている。そのためには基本資料である建物の年代を知ることがまず第一に必要になる。民家では一般的に、棟札や普請帳など文献によって建築年代がはっきりしている場合は少ない。今回の島原の場合は比較的多くの棟札があったが、半数は建築年代を確実にする文献等が見つからなかった。そこでそれらの建築年代は編年研究によって大枠を決めることになる。

われわれは編年研究をもとにして町家の変遷を知り、さらに町なみ、町の歴史を読み取ろうとしている。民家を保存し町なみを保存する場合には、その町の歴史が建物そのものから読み取れるように系統的な保存が考えられなければならない。

3　現地調査

島原の民家に関してはこれまでに幾つかの調査成果がある。しかし、町家の歴史に視点をあてた調査研究はおこなわれていない。今回の町家の編年研究は歴史的調査の最初の試みである。このような現況にあるので、まず最初に、従来おこなわれた調査資料を参考にして、町家の外観を観察しながらまち中を歩いた。町なみを構成している古い町家はみな瓦葺きである。土蔵造り、平屋建てか二階建てか、主屋主体部の軒高、主体部前面に付く下屋の長さ、主体部の正面上手に張りだす小部屋の存在、塀や不浄門（路地の口・中門・ゾウジ門などとも呼ばれる）の存在、二階の窓の大きさなど、時代とともに変化し建築年代に関係ありそうな形式や細部手法を注意深く探しだした。

次に、外観にくわえて建物の間取りや構造形式を知るため、建物の内部の調査をおこなった。家々にお願いして、平面や断面などの実測図面を作成し、また写真を撮った。図面を作り写真を撮りながら建物の造り方を知るのである。ここでも、時代とともに変化し年代をあらわす構造や形式、技法などの特徴を探しだすのである。各家々を比較するためにも図面や写真はどうしても必要である。離れたところに建つ建物を直接みくらべることは出来ないのだから。また、図面の作成とともに家の方々に建物がいつ建てられたかなどのことをお聞きし、棟札や普請帳など文献資料の有無を尋ねた。棟札や普請帳などがあれば多くの場合、建築年代が確定できる。上記のような詳しい調査は、結果として14軒についておこなった。

これらのうち、棟札が二階の梁などに打ちつけてある家が８軒あった。また、江戸時代末期の普請帳を所蔵する家が１軒あった。これら建築年代が確定する建物は、編年のさいに基準となる。建築年代が明確になる建物が多くあればあるほど、精度の高い物差ができる。精度のよい物差を用いることによって、建物や町なみの変遷を読みとる精度も高めることができる。

4　丸クギと角クギそしてしめなわと仏間

上記のとおり、編年の指標には、①その地域に特有なもの、②その地域の周辺さらに広い範囲に広がりを持つもの、③全国的に通じるものがある。使用しているクギが、丸クギか角クギか、この指標は全国的に通じる指標の一つである。まず、これについて説明する。

〈丸クギと角クギ〉

島原の家々は、古いもので江戸時代末期か明治期の

建築であり、多くはそれ以降に建てられたことがわかってきた。民家史の時代区分は、江戸時代を近世、明治以降を近代としている。江戸時代と明治時代とで世の中は大きく変わるのであるが、一般の民家がこの時代区分にしたがって急に変わるわけではない。政治や経済にくらべれば変わり方は緩やかである。江戸時代末期の建築か明治初期の建築か、その年代判定は難しい。ただこの時期の建物では、そこに使用しているクギが年代判定の有効な指標となる。つまり、使っているクギが丸クギか角クギかが役立つのである。

読者のみなさん方は、丸クギは洋クギともいわれ、現在一般的に使われているクギであるから、その形はおわかりであろう。この丸クギ・洋クギに対して、角クギは和クギとも呼ばれ、わが国で古くから用いられていた。角・丸、和・洋の文字がつくクギの名称は、釘の胴の断面形が角形か円形か、また、どこの産であったかをあらわしている。

わが国では、古代から明治初期まで角クギが使われていた。長い鎖国から開放され、欧米との貿易が盛んになると、当時、欧米で使われていた、いわゆる洋クギつまり丸クギが輸入されるようになった。この洋クギが民家建築に普及するのはいつか。これまでの調査の経験によると、明治10年代（1877～86）にほぼ全国的に普及し使われるようになった。輸入品である洋クギは意外に速く全国に普及したのである。

最初は輸入品であった洋クギも、明治34年（1901）に官営八幡製鉄所が創業し、製鉄の近代化が始まる。この前31年には安田製釘所が洋クギの生産を始めている。この後、公害問題など多少の混乱はあるが、大正に入ると洋クギはほとんど輸入品でなく国産品に変わる。洋クギを使うことについて、最初は抜けやすいのではないかなどと批判もあった。しかし、洋クギの値段は和クギにくらべて格段に安かった。和クギは鋼材であり、一本一本を焼いて打って作った。江戸時代の普請帳をみると、クギ代が建築費の数パーセントに及ぶ例がある。これに対して、洋クギは機械を用いて針金から大量に作れるから安くできる。われわれは、江戸末期・明治初期の建築にみえる建物に出会ったときには、和クギを使っているか、洋クギを使っているか調べ、明治10年代以前か以後かを判断するのである。ただ、この時代の建築はすぐ見えるようなところにクギを使っていないから注意深く調べなければならない。

〈しめなわ〉

つぎに、しめなわについて説明したい。これらは島原の調査地区に特有なもの、またこの地域の周辺にも及ぶ指標である。

前に記した通り、島原の家々の入口上のまぐさにしめなわを正月の期間だけでなく一年中飾っている。地元の方々はこの慣習を普通のことだと思っている。しかし、これは普通のことではない。年がら年中しめなわを飾っているのは、一般的には神主さんの家とか特殊な場合である。しめなわはどの家でも飾っているから年代判定の指標にはならない。ただ、島原の家々で一年中しめなわを飾っているのは、その家がキリシタンでなく神道であることを表現するものだった。

〈仏　間〉

島原の規模の大きな家々では、家の前面の壁線を前面の道路にあわせて一直線にせずに、主屋主体部のもっとも上手前面、つまり、客座敷の前に張りだして小部屋を設け、ここから道路に沿って下手に塀を建て、塀と建物の間に小さな坪庭を造り、この塀に門を造る。この門を不浄門などと呼ぶという。この張りだした小部屋は仏間である。仏間を上記のように張りだしてはいないが、家内のもっとも目立ちやすい位置に仏壇を安置している家もある。ともに仏間を特別扱いして仏教徒であることを建物の造りにあらわしているのである。

客座敷の前面に仏間を張りだす形式の家は、現在では建てられることはない。この形式の家はいつまで建てられていたのだろうか。編年の結果によると、弾圧されていたキリスト教が解禁される明治６年（1873）以前までであるようだ。

5　島原町家の特徴－調査でわかってきたことと課題

今回の調査によって島原町家の特徴がしだいにわかってきた。このいくつかを説明したい。

A　多くある伝統的な町なみ・建造物

市内を巡ってみてまず感じたことは、規模の大きな

町なみとともに、規模が小さくミニ町なみといった伝統的な集落町なみが多くあることである。すでによく知られている武家屋敷の町なみ、今回調査対象とした街道筋の町なみ、浜の川湧水とその周辺などなど。そしてまた、市内のあちこちに古い民家が数多く点在していることである。また、寺院が集中している町がある。これらを伝統的な町なみ、建造物の視点から分布調査をして地図上に落とすことが取りあえず必要であり、そして伝統的な町なみや建物が多くあることを、武家屋敷や湧水に加えて、市民に広く知ってもらうことが大切であると感じた。

B 町家の間取り

調査対象になった家は、部屋数が多く、どの家も床・棚・書院などの座敷飾りを備えた書院座敷をもっていた。書院座敷が間取りのなかで重要な位置を占めており、民家の間取りとしてすでに発達した段階に達している。これは建築年代が江戸末期以降、明治・大正期であるという時代、建物の規模が大きく上層の家であり、経済力のある家であることを大きく反映している。

全国各地にみられる町家の敷地は、ウナギの寝床といわれるように、一般的に間口が狭く奥行が長い。この敷地にしたがって間口いっぱいに建物を建てる。間取りは片方に表から裏に通じる幅の狭い「通り庭」を配し、この通り庭に沿って、ミセを道路に面して置き、部屋を１列ないし２列に並べている。

これに対して今回、調査対象となった島原の町家は、敷地の間口が広く、ここに平入の主屋を建て、比較的広い土間をとり、土間の上手に部屋を２列ないし３列配するものが大多数を占めていた。この間取りは、町家の典型というよりは、むしろ大規模な農家の間取りをおもわせる。また、多くの家では接客座敷に面して庭園を築いている。このように敷地にも余裕があったので、前に記したように、仏間を接客座敷の前に張りだして建てることが可能になった。

C 二階の発達

調査対象になった主屋の多くは二階建てであった。ただ、江戸時代の建築とみられる一部に平屋建てがあった。二階建てといっても、江戸時代から明治・大正期のものの二階は小屋裏をそのままあらわした一空間で、家財道具などの収納の場として使われていた。居室として間仕切りなどをしているものは、古くはないようである。これが建築した当初の二階の姿であるが、これらの家も現在は二階の一部に座敷を作ったり、個室を作るなど変化がみられる。これらは最初から軒高を高くして二階に居室を作るものへと変わっていく。上記のどの家も、階段が建物の中央部に位置するという共通点をもっている。天井は張ってなくとも二階を収納の場として使うために、最初から二階建てとして建てたことがわかる。

D 梁組と小屋構造

多くの主屋の梁組と小屋構造の形式は、大きく２種に分類できる。

①棟通りに断面の大きな地棟木を通し、その上に両側の軒桁から曲がりがある大梁を登り梁状に架けわたし、登り梁状の大梁の登りが低い場合にはその上に和小屋を組む。ただし、大梁の登りが高く母屋桁との間が狭い場合は小屋束のみを立てる。

②土蔵などに多くみられる形式で、直材またはやや曲がりがある登り梁を地棟木上で交差して組み、母屋桁を直接登り梁でうけるか、間がある場合には小屋束を立てて母屋桁をうける。この他、登り梁を軒桁から架けずに中間の母屋桁を台にして架けるものがある。

上の①、②の梁組と小屋構造は江戸時代末期にはすでにあらわれており、これらの形式によって時代の新旧は決めがたいが、二階の利用を考えると、登り梁が高く架かっている方が新しい傾向をしめしていると考えられる。

島原町家の編年の難しさは、江戸時代後期以前にさかのぼるような古い遺構がなく、対象とした古い町家と新しい町家の建築年代の差は100年ほどにすぎず、その差が小さいことにある。今回の調査で、いくつかのことがわかってきたが、今後さらに研究を進めることによって成果は増え、編年の物差は精度を高めることができるであろう。小屋構造では、その形式だけでなく、部材の使い方、仕上げなど微妙な点にも注意する必要がある。

E 畳の大きさ

これまでに調査対象になった家々の畳を測ってみると、その大きさは、どれも６尺３寸×３尺１寸５分を基準としている。この大きさの畳は京間畳と呼ばれて

いるものである。民家の畳の大きさの種類は、京間・中京間・江戸間などと呼ばれているものがあり地域性が顕著である。京間畳がもっとも大きく、中京間畳がこれに次ぎ、江戸間畳がもっとも小さい。江戸間の場合は、平面は心々制であるので部屋の大きさにしたがって畳の大きさは若干異なるが、ほぼ5尺8寸×2尺9寸である。江戸間畳と京間畳の面積の比は1：1.18であって、京間畳は江戸間畳より約18パーセントも大きいのである。

どの畳を用いるかは、その地域の文化の系統や建築設計計画に直接関わっている。今回調査したうち、小松屋は京都の大工が建てたと伝えている。そうであれば京都の建築技術が島原に直接持ち込まれたことも考えられる。

6　成果をまちづくりに活用する

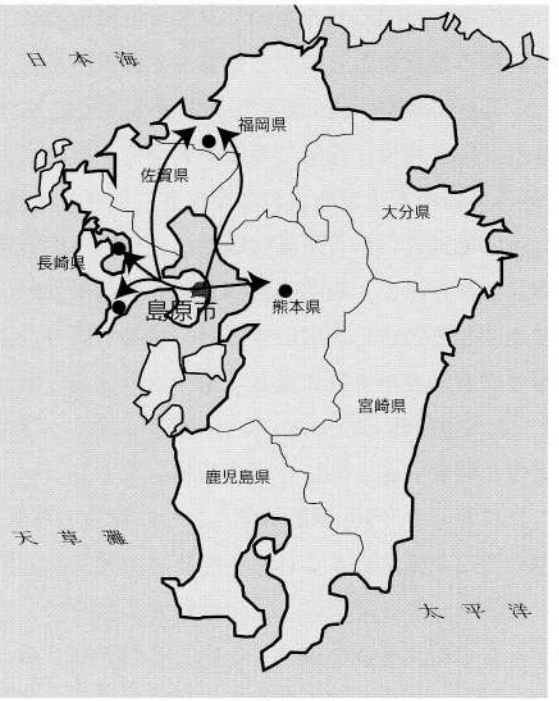
島原には、武家屋敷の町なみ、街道筋の町なみ、豊富な湧水群、そして街道周囲のまちにも、寺院が集中する地区にも、港の近くのまちにも、海辺の集落にも、湧水の水場を囲んだ集落にも、周辺の農村集落にも、多くの伝統的な建物や伝統的な姿を残す小集落が津々浦々に点在している。これらは祖先たちが築いてきた高い建築文化のあらわれであるが、そのなかには、埋もれた大いなる遺産にとどまっているものがある。これらのうち、今回は中心市街地の街道筋のまちと町家を取りあげた。この意図は島原城、武家屋敷の町なみ、湧水群などの遺産に、さらにもう一つ大いなる遺産「キリシタン弾圧の痕跡を残す町家と町なみ」を加えたかったからである。

今回の調査を通じて、わたくしは島原の住民・市民の方々とお付き合いすることが出来た。これらのなかには、まちの活性化を一生懸命に考え、それを実行に移している方々が相当数おられることがわかった。市内の津々浦々に数多く点在するこれらの遺産を、きちんとした問題意識のもとに調査研究し、まちづくりの武器として活かしていかない手はないと考える。

明治6年（1873）キリスト教が解禁されてからほぼ130年が経過する。現在、市民の間ではキリシタン弾圧はすでに記憶から遠のいている。しかし、建物はその記憶を今に伝えているのである。今回の調査研究は、キリシタン弾圧としめなわ、仏間の特殊なあり方がどう関わっているか検証する基礎的な資料にもなるだろう。これらのことを考慮しながら島原に多くある文化遺産自然遺産の価値をさらに再発見し、島原の発展に活かしていきたい。わたくしたちは、過去を捨て去るのではない、既成概念を捨て去り過去から学ぶのである。

〔注〕

民家の編年研究は昭和30年代にすでにおこなわれており、今回の研究は方法論としては新しいことではない。しかし、九州地方で、一定の地域で編年研究を詳しくおこなった例として、青山賢信の佐賀の「くど造り」に関わるもの、このほか一定地域で詳しい調査を実施したものとして佐藤正彦によるものなどがある。



歴史のまち島原からの交通
島原から長崎空港への直行バス
島原から福岡への高速バス
島原外港から大牟田三池港へ、さらに西鉄で福岡へ
島原外港から熊本へ
島原鉄道で諫早へそして長崎空港へ
島原鉄道で諫早へそしてＪＲで博多へ